

特集 食育授業を行うためのアプローチの仕方 **私のアプローチ方法 I**

待っているだけでは、授業時間は与えられません。「おいしい給食」を武器に、「食の専門家」として積極的に動いて、子どもたちの健やかな成長と健康を支えましょう。

Win-Winの関係を心がける

東京都板橋区立赤塚第二中学校 学校栄養職員 小林ちひろ

学校での食育授業に栄養士がかかわる際、「子どもたちは楽しく、先生方には負担が減って楽だ」と感じてもらえる、Win-Winの関係を心がけます。

授業を実践するためのアプローチとして、中学校では家庭科の調理実習などのサポートをして、先生と信頼関係を築きながら食の分野にかかわっていくことがおすすめです。

また、栄養士の初任や各年次の研修で食育授業が必須として依頼してみたり、自治体の研究部で自ら授業者に立候補するなど、管理職を巻き込みながら「やらなければならない環境」を意図的に作ることも有効です。

授業が実現したら、単発で終わらせず定着させることが重要です。毎年新しい内容を提案するのは双方の負担になるため、どうしても伝えたい内容の授業案を3~5つ厳選し、指導略案を用意しておきます。これにより毎年無理なく実施でき、異動先でもスムーズに提案しやすくなります。

まずは、担任の胃袋をつかめ！

千葉県 MAIWASHI

栄養教諭の大きな武器は「おいしい給食」です。まずは、担任の胃袋をつかむこと！

担任があなたの給食を好きになってくれると、給食時間の指導がスムーズにいきます。

さらに、給食時間はとにかく教室を回ること。30学級あったら30全部回って、子どもと担任に栄養教諭をアピールすることから始めるといいと思います。給食後の午後の時間は、職員室で今日の給食の感想を生声で聞き、献立修正につなげると、そこからまたコミュニケーションが始まります。

「食に関する情報収集は誰にも負けない」と思って、出勤前にニュースや新聞を見ていました。今も朝の新聞チェックは欠かしません。そこには、すぐ周知したいことがあったりします。「〇〇県でノロウィルスの集団感染があったので」と、給食前の手洗いの徹底をお願いしますことができます。専門職であることを何気なくアピールしていくと、存在感が生まれます。

失敗は避けなければいけません、失敗したことによって対処法を学べます。教育委員会時代に「ハインリッヒの法則」を知りました。1件の重大事故の背景には29の軽微な事故と300のヒヤリハットがあるという経験則で、小さな異常の段階で対応することが重大事故防止の鍵という考え方です。私は、事故を失敗に置き換えて考え行動していました。

人間は一人では何もできません。栄養教諭もチームの一員です。給食は関係ないたわいない話をしながら、チームの中で存在をアピールしてはいかがでしょうか。